『紅楼夢』と『源氏物語』の色彩表現について

斎藤喜代子

On the Expressions of Color Between *A Dream of Red Mansions* and *The Tale of Genji*

Saitou Kiyoko

Abstract: ***A Dream of Red Mansions*** **is a Chinese literary classic, while** ***The Tale of Genji*** is a Japanese literary classic. The two great literary classics have great comparability, and the similarities and differences between them have always been concerned by Chinese and Japanese scholars. This article will focus on the daily clothing of Jia Baoyu and Genji, the protagonists of the two works, and investigate the color change, color choice and color preference of the two protagonists' clothing through the analysis principle of chromatics, as well as the different characteristics of Japanese and Chinese literature reflected by them, so as to provide some clues for the analysis of the internal development law of Chinese and Japanese literature.

Key words: ***A Dream of Red Mansions; The Tale of Genji ;*** Color; Clothing

前言

『紅樓夢』は日本古典文学の代表的作品である『源氏物語』によく比せられる小説である。その類似點もしくは相異點は各種各様の観點から求めることが可能であるが、私はここに両書の比較研究の一環としてその色彩表現、特に男性主人公である賈寶玉と光源氏の衣裳の面におけるそれを考察してみることとする。というのは二人の作者は共に服飾に關することがらに非常な関心を示し、執拗にそれを描寫するという類似點をもちながら、その色彩感覺においてはそこに決定的な違いがあるように思われるからであり、その比較考察が兩國文學の特性を探る上の一つの手がかりともなればと思うからである。

一　賈寶玉の衣裳

『紅樓夢』を彩る色彩は何色か、こ

うたずねたときおそらくは誰もが、それは“紅”色であると答えるに違いない。そもそも『紅樓夢』という書名からして“紅”字を有し、それがまた金陵十二釵に關わる物語とあっては、『紅樓夢』が“紅”色に染め上げられているという感をますます深くするはずである。しかし『紅樓夢』の中で“紅”色と最も深い関わりをもつのは金陵十二釵中の何れの佳人でもなく、それこそはほかならぬ「愛紅の癖」をもつ人『紅樓夢』の主人公、賈寶玉である。“紅”色を通して觀得した彼の人生觀を主軸に据えて、彼の身邊はそれを象徴する“紅”色で埋めつくされている。試みにそれをここに列擧してみよう[1]。

○二色金百蝶穿花大紅箭袖(第三回。旁點筆者。以下同じ)
○頭上週圍一轉的短髮都結成小辮、紅絲結束(第三回)
○身上穿着銀紅撒花半舊大襖(第三回)
○錦邊弾墨襪、厚底大紅鞋(第三回)
○大紅猩毡斗笠(第八回)
○一顆核桃大的絳絨簪纓(第八回)
○絳藝軒(第八回)
○裏面紅襖襟(第十七・十八回)
○穿着大紅金蟒狐腋箭袖(第十九回)
○編一根大辮、紅絛結住(第二十一回)
○怡紅院(第一一十三回)
○怡紅快綠(第二十六回)
○大紅銷金撒花帳子(第二十六回)
○一條血點以的大紅汗巾子(第二十八回)
○紅麝香二串(第二十八回)
○鶯兒道:『汗巾子是什麽顔色的?』寶玉道:『大紅的』(第三十五回)
○白綾紅裏的兜肚(第三十六回)
○穿着銀紅紗衫子(第三十六回)
○裏面只穿着半舊紅綾短襖(第四十五回)
○猩猩毯斗篷(第四十九回)
○大紅猩毡(第五十回)
○大紅猩猩毡(第五十二回)
○穿着大紅綿紗小襖子(第六十三回)
○枕了那紅香枕(第六十三回)
○褲内露出血點般大紅褲子來(第七十八回)

以上の例に見られる大紅・銀紅・大紅猩・絳・紅・猩猩・大紅猩猩という色彩は、その明度及び彩度の點においてそれぞれ差異はあるにしても、何れもが“紅”という色に統合される色彩名であることはいうまもない。いまこれらの色彩名の示す色を大雑把に捉えてみると“大紅”は深紅色。“紅”は血のごとく、火のごとく、あるいはまた石榴花のごとき赤。“銀紅”は桃色に銀朱を加えた鮮紅色。“大紅猩”は猩猩色に同じく鮮やかな紅色。“絳”は深紅色。“猩猩”は鮮紅色。[2]と、一應このように整理することができるが、中國の色名による色見本の色が必ずしも鮮明でなく、また今日では用いられぬ色名もあって[3]、色彩を文字で捉えるもどかしさを免れえない。ただ差し當ってはこれらの色彩名がともに“あかいろ”(Red)に集約できることさえわかればそれで事足りるかと思う。

ともあれ寶玉の身邊はこのように衣服・裝身具・調度品から室名に至るまで“紅”色にとり圍まれている。ところで、ここに私が關心を寄せる點はその“紅”という色の扱われ方についてである。具体的にいえば『紅樓夢』において

は紅色は他の色に侵蝕されることなく、ほとんど常に紅色としての本來の色を失わないということ、そしてその現象は配色の面においてほとんど色を重ねるということがなされずに、色を平面的・竝列的に置くという方式によって生れているということである。いまここでは紅色のみを取り上げて述べているが、配色の面における他の色の扱われ方も同様である。これは日本文學とりわけ王朝文學におけるいわゆる襲ねの配色、例えば衣裳の表地が白色、裏地が紅色の、いわゆる櫻がさねと呼ばれるような配色方式とはかなり異なる現象である。以下にその現象を回を追って觀察してみることとしよう。

『紅樓夢』第三回に、〇頭上戴着束髪嵌寶紫金冠、齊眉勒着二龍搶珠金抹額；穿一件二色金百蝶穿花大紅箭袖、束着五彩絲攢花結長穗宮絛、外罩石青起花八團倭緞排穗褂；登着青緞粉底小朝靴　と。

これは寶玉が林黛玉の前に始めて姿を見せたときのいでたちである。先ず、頭には七寶象嵌の金冠を戴き、額には雙龍が珠を爭う金色のはちまきをしめている。身には深紅色の地に濃淡二色の金絲を用いて花に舞う百蝶の圖柄をぬふさいとりした細袖の上衣を着用し、腰には五色の絹絲で花模様を刺繍し、長い總を結んだ極上の絹のしごき帶を結んでいる。上には鮮やかな藍色の地に龍の圓型模様を刺繍した日本繻子の、これまた總を垂らしたガウンをまとい、足には黒緞子白底の禮裝用長靴をはいている。

ここでは寶玉は「大紅」色の上衣を着用しているわけであるが、その大紅色の周圍は目眩めきばかりの色によって埋めつくされている。とりわけ金色の輝きは壓倒的で大紅・五色の色はこれと最大限に映發し合って、そこに絢爛豪華な色彩美を作り出している。しかもなお、頸には金の螭の瓔珞を掛け、さらにまた五色の絹絲で打った組み紐で一つの美玉を下げている。その胸もとはこれまた金と五色の色で彩られている。そしてその中心にいわゆる「鮮明美玉」（寶玉が出生時に口中に含んでいた玉）が配置されている。

つまりここに作り出された色彩美は紫金・五色・美玉の三要素、すなわち金屬元素の最たるものと、色彩中の正色と、鑛物元素の最たるものとによって構成されているということである。しかもその中の五色がそれぞれ本來の色を失うことなく、青は青そのままの色で、赤は赤そのままの色で、それらは決して混合されることなしに置かれて、純色の組み合せによる多彩美を構成しているということは、中國文學における色彩感覺を探る上において注意すべき點かと思う。そしてそこに純金の輝きと美玉の潤澤とが加わって光彩と色彩の競演世界を展開している。

また第三回に、〇頭上週圍一轉的短髪都結成小辮、紅絲結束、共攢至頂中胎髪、總編一根大辮、黒亮如漆。從頂至梢、一串四顆大珠、用金八寶墜脚；身上穿着銀紅撒花半舊大襖、仍舊戴着項圈、寶玉、寄名鎖、護身符等物；下面半露松花色撒花綾褲腿、錦邊弾墨襪、厚底大紅鞋　と。

これは寶玉が衣裳替えをして再び黛玉の前に現れたときの姿である。寶玉の

髪の色は黒うるしのようにつや光りがしている。それを鮮やかな赤の絹絲で束ね、辮髪は四個一繋ぎの大きな眞珠によって飾られ、その先端には黄金作りの八寶の根付けが輝いている。身には花模様を散らした鴉色の長上衣、その上には例の美玉やら寄名鎖やらが光っている。下にはこれまた花模様を散らした淺黄色のズボン、それに錦でふちどりした模様付きの靴下に深紅の靴である。元結いは紅、上衣は銀紅、褌子は松花色、靴は大紅と、それらの色はそれぞれ競り合うように竝べられている。「撒花」の文字は色彩語ではないけれども、多彩の色絲がそこに躍っていることというまでもない。「錦」とはまた色絲で織った五色に輝く絹である。しかもこうした多彩の上になお加えられているのが美珠・美玉、それに燦然と輝くの金八寶である。色という色をことごとく使った上になお目眩めき輝きが加えられて、ここに壓倒されんばかりの極彩色の世界が作り出されている。

第八回に、〇頭上戴着絲嵌寶紫金冠、額上勒着二龍搶珠金抹額、身上穿着秋香色立蟒白狐腋箭袖、繋着五色蝴蝶鸞絛、頂上掛着長命鎖、記命符、另外有那一塊落草時啣下來的寶玉　と。

これは寶玉が薛寶釵の病氣見舞いに出向いたときのいでたちである。頭には深紅の冠飾りのついた七寶・純金の冠、額には金のはちまき、身には狐裘を裏打ちした秋香色の上衣、腰には五色の蝴蝶や鸞をぬいとりした組み紐、首には輝く長命鎖と例の鮮玉である。寶玉は秋香色の狐裘を着込んでいる。秋香色とはどんな色だろうか。『色彩描寫詞典』には淡黄綠の色とある。冬衣は狐裘、それに大紅猩毡斗笠である。大紅猩はいわゆる猩猩色、鮮やくな深紅色のフェルト笠である。季節は冬、外は霰が降っている。しかし寶玉の服色は季節に關わりなく依然として變らぬ色彩の集合體である。

第十五回に、〇戴着束髪銀冠、勒着雙龍出海抹額、穿着白蟒箭袖、圍着攢珠銀帶　と。

これは寶玉が秦可卿の葬儀のとき北靜王水溶に會見したときの姿である。このとき父の賈政は寶玉に喪服を脱がせ、衣裳を整えさせて引き連れて出たわけだが、頭には例の「嵌寶紫金冠」に代って銀冠が、はちまきも例の「二龍搶珠金抹額」に代って金を避けたものが、また、身には例の“紅”ならぬ“白”の箭袖、帶はまた五彩ならぬ、眞珠を繋いだ銀色のそれが用いられている。ここには平常時に見られるあの燦然と輝く金と五彩の目眩めき色調に代って銀と白との色調が見られるが、その白は銀・珠の輝きを加えることによって一見、色を脱いたかのような服色が却って平常の多彩のそれにもまして煌めいて見える。

第十九回に、〇穿着大紅金蟒狐腋箭袖、外罩石青貂裘排穗褂　と。

これは寶玉が宿下りをした襲人を訪ねたときのいでたちである。寶玉はこのとき仕立ておろしの衣裳を着ている。季節は一月、深紅の地に金絲で蟒をぬいとりした表地に、狐腋を裏打ちした冬衣。その上に總でふちどりをした石青色の貂の皮ごろもである。石青は鑛物性の變色しない顔料である。紅と金と石青と、ここにも極めて鮮明な色の組み合せが見られる。

第三十六回に、〇白陵紅裏的兜肚、上面扎着鴛鴦戯蓮的花様、紅蓮緑葉、五色鴛鴦　と。

これは襲人が寶玉の肚掛に刺繍をするその圖柄と配色についての描寫である。白の綾子に赤地の裏が配されている。綾子は薄い絹織物である。裏の紅の色を透しそうであるが、その白綾子は五色のぬいとりでびっしり埋めつくされていて紅との映發を容さない。鮮やかな極彩色の美である。

第四十五回に、〇裏面只穿着半舊紅綾短襖繋着綠汗巾子、膝上露出油綠紬撒花褌子、底下是掐金滿繍的綿紗襪子、靴着蝴蝶落在鞋　と。

これは寶玉が雨の中を簔を着けて黛玉を訪ねたときのいでたちである。紅い綾子の上衣に綠のしごき帯、油綠色の紬地に模様を散らした褌子、一面にぬいとりを施し、金絲でふちどりをした綿紗の靴下である。紅と綠、それに光澤のある深綠色に金と、色彩の亂舞である。しかも「撒花」「蝴蝶落花」の文字は色彩語ではないけれども、そこにはまた五色の色絲がせめぎ合っていることというまでもない。

第五十二回に、〇身上穿着荔色多羅呢的天馬箭袖、大紅猩猩毡盤金彩繍石青妝緞沿邊的排穂褂子と。

これは寶玉が王子騰の誕生祝いに出向くときのいでたちである。外はいまにも雪の降り出しそうなけはいである。寶玉の身にまとうのは天馬皮を裏打ちした荔枝色(熟した荔枝0ような紫紅色)のラシャの上衣、ガウンはといえば、猩猩緋のフェルト地に金絲を渦巻きにして、五色のぬいとりを施し、石青色の妝緞子でふちどりをして總をつけたものである。荔枝色が丹系統の色であることはいうまでもな。その上に羽織るのが金絲・五色・石青色を以ある。猩猩緋に金と石青の色が強烈である。

第六十三回に、〇只穿着大紅綿紗小襖子、下面緑綾弾墨夾褌、散着褌脚、依着一個各色玫瑰芍薬花瓣裝的玉色夾紗新枕頭　と。

これは寶玉が自分の誕生日に部屋付きの侍女たちと共に酒令をやるときの姿である。深紅の上衣、それに緑色の褌子である。紅と緑という鮮烈な配色は中国の色彩美の典型であるが[4]、色の鮮やかさの基準とすとこの色彩に對する美意識に注意したいと思う。因みに紅と緑の彩度を見るにそれそれ14.10と高い数値を示しているが、これを光源氏の服色によく使われる色目の彩度と比べてみた場合はどうであろうか。「櫻」の彩度は2.5、「葡萄そめ」は3、「しおん」は4.8、「うすへに」は8.5、「うすはなだ」は6.5、「ふたあい」は3、といったようにここに極めて對照的な結果が數値で示し出される。

賈寶玉と光源氏の服色の、鮮やかさにおけるこの度合いの開きを、そのまま兩國の色彩に對する美意識の隔りと見てとるのは早計であろうか。この、色は鮮明なものでなくてはならないとすることについて、第三十五回に非常に興味深い描寫がある。それは寶玉が寶釵の侍女である鶯兒にしごき帯の袋を編ませる場面である。鶯兒が先ずしごきの色は何色かとたずねると寶玉は“大紅”。であると答える。すると鶯兒は次のようにいう。「深紅には黒が最高。さもなくば石青

（鑛物質の藍色の顔料で變色しない）ですね。そうでないと色の押さえが效きません」と。（「大紅的須是黑絡子纔好看、或是石青的纔壓的住顏色」）そこでまた寶玉が「松花色（淺黄色）には何色が合うか」とたずねると鶯兒は「淺黄色には桃紅」と答える。寶玉がいう「それこそあでやかというものだ。それから、あっさりとしていて上品な中にも何か、こう、なまめかしさのある、そういうのも一つ欲しいな」「それでしたら淺綠色、わたしの一ばん好きな色ですの」というわけで鶯兒は編み込む柄を選んで先ずは桃紅色の袋を編み始める。と、そこへひょっこり寶釵が現れ、すでに半分ほど仕上ったそれを見ていう。「ありふれていてつまらないわ。むしろ玉を編み込んだ袋を作った方がいわ」そこで寶玉、得たりとばかりに「ではどんな色の組み合せがいいでしょう」といえば、寶釵は次のようにいう。

「閒色なんそ絶對に使ってはだめ。深紅を使ったら色の映りが惡いし、黄色では見映えがしないし、黑だと暗すぎます。そうね、――そうそう、金絲と、黑い珠を通した絲を取り合せ、それを一本ずつ捻って編み上げたらすてきでしう」と。（「若用雜色、斷然使不得。大紅又犯了色、黄的又不起眼、黑的又過暗。等我想個法兒：把那金線拿來、配着黑珠兒絲、一根一根的拈上、打成絡子、這纔好看」）ここで鶯兒は“大紅”に配する色としては黑もしくは鮮麗な藍青色の石青を擧げている。また寶釵は「雜色」の使用を認めない。そして配色は「犯色」ではいけないし、「不起眼」でもいけないし、また「過暗」でもいけないといっている。つまり色映りのよいもの、見た目にパッとするもの、明るいもの、というわけである。ぼやけた色をしりぞけ、つとめて鮮明な色を求めるのである。寶釵が鶯兒の編んでいる袋を見てそれはつまらないといったのは、松花色に桃紅色を配するのはつまらないという意味であると思う。從って寶玉がそれではどんな色を組み合せたらよいのかとたずねるのである。それに對して寶釵は、松花色に雜色は映えないから使ってはいけない。さればといって緋色を配したのでは色映りが惡いし、黄色ではパッとしないし、黑では暗すぎるというのである。色彩は「不起眼」であってはならないのである。

また第四十回にも配色に関する話がある。それは賈母が黛玉の館である瀟湘館へ出向いたとき、ふと窓に貼ってある紗の色が褪せているのに気付き、早速貼り換えさせるよう熙鳳に命じる場面である。このとき賈母はいう。「この紗は貼ったばかりのときはきれいだが、しばらくすると青緑が青緑でなくなってしまう。ここの中庭には桃の樹も杏の樹もなく、この竹からして緑なのだから、そこへ緑の紗を貼ったのではかえって不釣合いだね」と。（「這個紗、新糊上好看、過了後來就不翠了。這個院子裏頭又没有個桃杏樹、這竹子已是緑的、再拿這緑紗糊上、反不配。」）

瀟湘館は門を入ると路を夾んで両側は竹の植え込みで、邊りは一面の青苔というたたずまいである。いまその竹の緑に染まりそうな部屋の中に緑紗を貼ったのではそぐわないというのである。それでは何色を配したらよいというのか、銀

紅色、つまり桃色に銀朱を加えた鮮紅色のものに貼り換えろというのである。釣り合う配色、それは竹の緑に桃杏の紅なのであり、それが美しい配色なのである。美しいとはいえないのである。

『源氏物語』若葉上の巻のごとく、雪の日に白き御衣、白き紙、白き梅花と、白一色で統一する色の配合を美しいとする色彩感覚と、『紅楼夢』第五十回の翠庵に紅梅を求める場面のごとく、一面まばゆきほどの雪の白に胭脂を吐かんばかりの紅梅を配し、またそこに宝玉の燃え上らんばかりの猩猩緋の衣裳を配して、これをたとえようもなく美しいとする色彩感覚を対比した場合、そこにはかなり距った色彩感覚の存在することを認めざるをえないであろう。

話を第六十三回に戻そう。酒令の場で寶玉は玉色の夾紗の枕にもたれているが、枕の中には玫瑰とか芍藥とか、とりどりの花瓣が詰められている。そこにはまた色彩語は見えないけれども玉色の地色を五彩の花瓣が彩るようで、さながら刺繍枕のごとくである。「各色」の文字は匂い立っ花瓣の色の集合としてとらえられるべきであろう。

第七十八回に、〇松花綾子夾襖、襖内露出血點般大紅神子來　と。

これは賈政に伴われて外出をしていた寶玉が大觀園に戻って來たときの様子である。彼は緊張感から解放されてそれとばかりに冠をはずしたり帶を解いたり、長上衣まで脱いでしまう。その下に現れたのがこの色彩である。この血のごとく赤い褌子は亡き晴雯が仕立てたものである。それを見て侍女の秋紋と麝月は彼女のことを思い出し、すぐそばに寶玉がいるのも忘れてついついお互いにその死を悼むことばを口に出してしまう。はっと氣付いた秋紋はそこで話を紛らして次のようにいうのである。「この褌子は淺黄色の長上衣、石青色の長靴によく映りますこと。このまっ青なお頭、まっ白なお顔がいよいよ引き立ちますこと」（「這褌子配着松花色襖児、石青鞾子、越顯出這綻青的頭、雪白的臉來了。」）と。ここには大紅に映る色が示されているが、その配色は實に鮮明である。

二　光源氏の衣裳

『源氏物語』を支配する色彩は何色か、こうたずねたときおそらくは誰もがそれは“紫色”であると答えるに違いない。そもそも『源氏物語』の作者名からして“紫”字を有し、光源氏の最愛の女人の名がまた紫の上であり、この物語をまた『紫のゆかり』とも『紫の物語』とも呼ぶことからしてもそれは肯ける。しかしこの物語の主人公である光源氏の服色は『紅樓夢』における賈寶玉が“紅”と着していたのとは異り、必すしも“紫”色ではない。以下にその服色について觀察してみることとしよう。[5]

薄雲の巻に、〇山里のつれつれをも、絶えずおぼしゃれば、おほやけ・わたくし、物騒がしきほど過ぐして、わたっり給ふとて、つねより殊に、うちけさうじ給ひて、櫻の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、たきしめさうぞき給ひて、まかり申し給ふさま、くまなき夕日に、いとゞしく清らに見え給ふを、[6]と。

これは源氏が明石の上のもとに出向

くときのいでたちである。このときの源氏の衣裳は“櫻”の御直衣である。つまり表は白、裏が紅の袷の直衣、いわゆる櫻襲ねの直衣である。ここでは白と紅とがそれぞれ獨自の色を競り合うことなく巧みに融合して全く別種の“櫻”という薄紅色を生み出している。この、二色を重ねるという配色の方式は『紅樓夢』の竝列的な配色方式と際立って異る點であろう。なおここに薄紅色の薄いという色の濃度は、王朝の色彩感覚、とりわけ『源氏物語』の色彩を考える上においてかなり大事な要素の一つであろうと思う。しかもここに注意したいことは、その桜の御直衣は下に重ねた「えならぬ御衣」及び「たきしめさうそ」の語によっていよいよ香り立ち、折からの「くまなき夕日」に映えてひとしお美しく見えるという表現である。ここに使われている色は櫻という淡紅色ただ一色きりであるが、その色は香と、そしてタ映えという自然の光彩の中にあるということ、服色が香及び自然の色と密接に結びついているという點はまた際立った一つの特徴であると考えられる。

花宴の巻に、〇御裝など、ひきつくろひ給ひて、いたう暮るゝ程に、またれてそ、渡り給ふ。櫻の、唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、しりいと長く引きて、皆人はうへの衣なるに、あざれたる大君姿の、なまめきたるにて、いつかれ入り給ふ御さま、げに、いと、殊なり。花の匂もけおされて、なかなか事ざましになむ。[7]と。

これは源氏が右大臣家の藤の宴に出向くときのいでたちである。このときの源氏の衣裳は櫻の唐の綺の御直衣に、裾を長々と引いた葡萄染の下襲ねである。「櫻」は櫻襲。「唐の綺」は唐より渡來のあや織りの薄い織物である。そして下襲の色は葡萄染である。葡萄染とは葡萄葛の實で染めた暗い灰赤紫の色である。櫻襲の裏地の蘇芳(くすんだ赤色)は、この葡萄染の色とは同じ赤系統の、しかも近似した色目であれば相反發することなく優雅に融合する。ここでも色はただ二色しか用いられていないが、その二色の扱われ方はこれまた他の色との競り合いの中に置かれるのではなく、自然の光、風物との取り合せの關係で置かれていることに注意したい。源氏がこのような「大君姿」で登場した時刻はといえば、晩春のすでに暮れ果てた頃おいである。闇色の中に白か紫か、藤の花の淡い色は溶け入りそうである。源氏の優雅な姿はそうした背景の中にある。であれば「花の匂もけおされて」なのである。闇色と、闇色の中に吸收されてしまいそうなうす紫の藤色の中にある「櫻の、唐の御直衣」、しりいと長く引ける「葡萄染の下襲」の色である。『源氏物語』の色彩表現は、色と色との競り合いという方式をとらず、その色目を巧みに自然現象、自然の風物と映發させているということをここにも見ることができるであろう。

行幸の巻に、〇六條殿は、櫻の、唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひきかさねて、しどけなきおほ君姿、いよいよ、たとへんものなし。[8]と。

これは源氏が三條の宮の主人、大宮の病気見舞いに出向いたときのいでたちである。このとき源氏は櫻襲の直衣に今様色、すなわち流行の薄い紅色の下襲を

何枚も重ねている。桜の色と薄紅色と、これもまた双方の色は反発することなく柔らかに融合して美しい配色の美を見せてい。

帚木の巻に、〇白き御衣どもの、なよゝかなるに、直衣ばかりを、しどけなく着なし給ひて、紐などもうち捨てゝ、そひ臥し給へる御火影、いとめてたく、女にて、見たてまつらまほし[9]と。

これは長雨の晴れ間なきある日、源氏が殿上の部屋で書物を読んでいるときの姿である。源氏が着ているのは柔らか白き御衣、つまり白い下着である。それを何枚か重ねた上に雑作に直衣だけをはおっている。ここに出てくる色は白ただ一色である。白は全ての色を吸収し、またすべての色を発散される。色を超えた色ともいいうる。その白が、白独自の色を発散させれのは光の中においてである。ここに作者は「そひ臥し給へる御火影、いとめでたく」という。それは灯影に映し出された源氏の姿である。なよゝかなる白き御衣はやわらかな灯影のもとに照らし出されて白の鮮烈さが抑えられ、「そひ臥す」という姿態と相俟っていよいよなよゝかなる白として映するのである。『紅楼夢』における白と銀との取り合せと比較したとき、かの白の強さとこの白の柔かさとが對照的である。

須磨の巻に、〇白き綾のなよらかなる、しおんいろなどたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく、うち亂れ給へる御さまにて、[10]と。

これは須磨に籠居した源氏が、秋のあるタ暮れ方、海の見渡せる廊にたたずんる姿ある。白い綾の柔らかい下着に紫苑色のをも重ね、こまやかなる御直衣、つまり濃い縹色の直衣という組み合せである。光澤のある白にくすんだ青紫と、くすんだ青の同系色の配色は騒々しくなく、これまた手に持てる黒檀の數珠の黒が映えてまことに静かに美しい。作者はこの姿を「ゆゝしう清ら」と表現している。

また須磨の巻に、〇山がつめきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣・指貫、うつやつれて、殊更に、ゐ中びもてなし給へるしも、いみじう、見るにゑまれて清らなり、[11]ど。

これもまた須磨に在る源氏の姿である。ゆるし色とは濃い紅や紫が禁色であるのに對して薄い色をいう。ここでは薄紅色である。その上に緑がかった灰色の狩衣・指貫である。薄い色とくすんだ色との組み合せが静かである。作者はこの姿を「山がつめきて、清らなり」と表現しているが、「清ら」という語は派手でない色彩美を指しているようである。しかし光源氏であってこそこの「山がつめきたる。衣裳が清らに見えるのである。内面から自ずと發散する高貴の輝きが、くすみの色と映發して美しいのである。色目を表わす語はここでもわすかに語に過ぎないけれども『源氏物語』の色彩表現の深層部には必ずこのように光るの君の内なる輝きが前提されると考えてよいであろう。

藤裏葉の巻に、〇おとゞは、うすき御直衣、白き御衣の、唐めきたるが、文、けざやかに、つやつやくとすきたるをたてまつりて、なほ、盡きせず、あてになまめかしうおはします。[12]と。

これは源氏が内大臣の婿となったタ霧を迎えたときの姿である。「うすき御

直衣」とは薄縹色、つまりくすんだ薄青色の直衣である。それに文様がはっきりと艶やかに透けて見える白の唐織めいた下着を着用している。薄青と光澤のある白との配色が上品で美しい。作者はこれを「なほ、盡きせず、あてになまめかしう」と表現している。『源氏物語』の色彩表現の中でこのくすみの色はまた大切な要素の一つである。

若菜上の巻に、〇やがて見出だして、端ちかくおはします。白き御衣どもを着給ひて、花をまさぐり給ひつゝ、友待つ雪の、ほのかに殘れる上に、うち散りそふ空を、ながめ給へり。[13]と。

これは源氏が女三の宮へ手紙を差し上げたあと、縁近くに坐って雪空を眺めているときの姿である。ここに使われている色は白ただ一色である。しかしこのとき源氏の手には花があり、空は薄雪を舞わせている。花は白梅である。これより先に源氏は女三の宮へ雪に因んだ歌を白い紙に書き、梅の枝につけて贈っている。雪に因んで白い紙を用いたならばその梅もまた必ず白梅である。この朝の「白き御衣」は薄雪の白と、梅花の白と映り合って、白が色として最大限に発色している。白を他の色と対立させて歳立たせるのではなく、白を白の中で発色させるという色彩表現はまた一つの特徴かと思われる。これを賈寶玉の、季節時候とは全く関わりあいのない服色と比較してみたときまことに対照的である。

（続く）

注釈：

［1］ 兪平伯校訂八十回校本（中華書局）による。

［2］ 章銀泉編『色彩描寫詞典』（寧夏人民出版社）」よる。

［3］ 『色彩描寫詞典』服色百例。

［4］ 水上静夫は『花は紅·柳は緑』（八坂書房）及び「漢文の色彩語」（明治書院）『日本語学』一九八八年一月号）の中で「赤と青とは中國人がいちばん美しいと感ずる色であり、彼らの生活の基本色であり、それは蘇生、活動を象徴するものである」と述べている。

［5］ 日本古典文學大系本（岩波書店）による。

［6］ 因みにこの色彩語の部分を豐子愷譯『源氏物語』（以下豐譯と畧記）は、「表白裏紅的常禮服」と。林文月譯『源氏物語』（以下林譯と畧記）は、「櫻色直衣」と譯出している。

［7］ 豐譯は「白地彩絞中國薄綢常務服、裏面襯一件淡紫色襯袍」と。林譯は「面白裏紅質薄的唐羅外褂、下面抱着面紫裏青的長長的裳裾」と。

［8］ 豐譯は「白面紅裏的中國綾羅礼服、内襯當時流的深紅梅色内衣」と。林譯は「唐土舶來的櫻紅色直衣、外罩一襲深紅色袍子」と。

［9］ 豐譯は「柔軟的白襯衣」と。林譯は「柔軟的白衣」と。

［10］ 豐譯は「柔軟的白綢襯衣、上單淡紫面、藍裏子的綢袍、外面穿着一件紫色常禮

服」と。林譯は「上身着白色柔軟的絲衣下身則淡紫色的神袴、外面　隨便地罩着一襲褂子」と。

［11］豐譯は「穿着淡紅透黄的襯衣、上罩深藍色便服和裙子」と。林譯は「穿着附近樵夫般的淡褐帶黄色的底衣、外加青灰色狩衣及褲袴」と。

［12］豐譯は「穿淡色常服、内襯唐裝式的白色内衣」林譯は「穿淡色直衣、那一身白色倣唐的衣裳」と。

［13］豐譯は「白色便服」と。林譯は「白裳」と。

※本論文は二松学舎大学『二松』誌（第4号1990年）に掲載。

（勤務先：二松学舎大学名誉教授）